

W.E.グリフィス福井来住 150 年 解説展示「グリフィスが語る日本仏教」

1. 来日前後のグリフィス

グリフィスは小さい頃から信仰心のあつい母親の影響で教会に通っていましたが、牧師になる志望はなく、職人として働いていました。そんな二十歳の彼に突然、自分の内側から神の声が静かに、でもはっきりと聞こえる、という経験がおとずれます。彼は数週間、その声に抵抗したそうですが、ついには自分の人生は人々に福音を説くことだと決心します。それです、ラトガース大学に入学して牧師としても必要な一般的教養をみにつけ、卒業した後は牧師になるための神学校へと進む、母からも望まれていた道を歩きはじめたのです。

神学校に在学中、グリフィスは所属する教会を通じて、日本の内地でアメリカ式の学校教育に取り組んでほしいという要請を受けます。在日宣教師が福井藩から受けた案件で、教会は彼を選んだのでした。それはまだキリスト教が禁じられている国において、キリスト教徒が信頼を得て、やがて信仰を説くための確かな道を築く仕事を意味しました。こうして、ちょうど今から 150 年前の 1871 年 3 月から約一年間、グリフィスは福井の地で暮らすこととなったのです。

グリフィスは福井での仕事のあと東京で二年半、教職に就きました。東京滞在中、キリスト教が日本人にも事実上解禁されました。彼はアメリカに帰国した後、再び神学校に通いますが、それと並行して、日本の歴史と現状を英語で紹介する本『皇国』を書き上げ、世に出しました。彼は神学校の課程を修了すると、ニューヨーク州での牧師職を紹介されて赴任し

ましたが、もしその仕事がなければ宣教師として日本に戻るつもりだったといいます。

グリフィスは晩年まで再来日こそしませんでした。が、牧師としてアメリカ人の心を束ねる仕事に努めるとともに、日本について解説する本をたくさん書き、たくさん話しました。

米国において偏見をまぬがれない東洋の異教徒であった日本人への、同じ人類としての共感を求めました。やがてキリスト教徒となるべき、また遠からず近代国家の仲間ともなるであろう日本人を、その歴史を知ることによって理解し、国際社会に温かく迎えるべきだと。そんなグリフィスの思いが詰まった本『皇国』（原題 The Mikado's Empire）から、今回は彼が日本の仏教について解説している章をご紹介します。その記述には、彼という人間の最も重要な基盤にあった、彼の宗教心のありようがよく現れています。

2. グリフィスが語る浄土真宗

日本仏教におけるプロテスタント、それは・・・親鸞聖人が開いたシンシユーの信者たちである。

プロテスタントとは、西ヨーロッパの教会を束ねていた教皇の支配体制から分かれ出た諸宗派で、グリフィスを日本に派遣した宗派もそのひとつでした。

ローマ教皇の教会、すなわちカトリックからプロテスタント諸派が分裂したきっかけは、お金に執着する聖職者たちに対する批判でした。そして、とてもまじめな信徒の中から、神様が人々を救済するのは、教会での立派な儀式によってでも、聖職者がとりなしてくれるからでもなく、ただ神様の御意志によるのだから、ただ心からの信仰さえあればよいのだとい

う主張がなされ、それがプロテスタント神学の基礎になりました。そのような信仰をもつグ

リフィスにとって、日本仏教は概ねカトリックにとても似たものに見えました。

ローマ様式のキリスト教をはっきり特徴づけているもののほぼ全てが、仏教にも見出される。肖像、絵画、照明、祭壇、お香、祭服、ミサ、・・・独身、断食、・・・罪滅ぼしの苦行、聖人や司祭によるとりなし、贖宥・・・等々

みばえの豪華さで信者をひきつけることも、俗世から離れて厳しい修行にいそしむことも、グリフィスの信仰においては意味がありませんでした。そんな彼にとって、「勤めによる救済を説く」諸派とは対照的に、ただひたすらに阿弥陀仏による救済を信じ、その信仰によって生きることをのみを説く浄土真宗の門徒はまさに「イエスの代わりにブツダを信ずる」プロテスタントだったのです。

グリフィスは、真宗門徒の「敬虔な祈り、清らかさ、まじめな暮らし」に強い好意をもちました。カトリックの聖職者と同じく当時は日本の僧侶も、真宗以外では妻をもつことはありませんでした。グリフィスにとって結婚して家族をもつことは神が創造した自然の摂理であり、不浄なことではありませんでした。彼も帰国後牧師となってから結婚し、子供たちに囲まれる家庭をもちました。福井の女子教育の先駆者、禿すみも、グリフィスの『皇国』執筆に協力した生徒今立吐酔（とすい）も、真宗寺院に生まれました。

プロテスタントにとって重要だったのは、信徒ひとりひとりが、聖職者のとりなしによってではなく、自ら神の言葉に向き合うことでした。そのためには信徒自身が聖書を読んで理解する必要があります。カトリックではどこの国でもラテン語の聖書を用いましたが、これ

はるか昔のローマの言語で普通の人には理解できません。プロテスタント諸派は積極的に自国の民族語に聖書を翻訳して広めました。たとえ民族語でも読み書きのできる人が昔は少なかったので、教育がとても重要になります。

仏教のお経も、普通に使われている日本語ではありません。戦国時代に真宗が広く普及する上で力があつたのは、蓮如が平易な文書で庶民の男女に信仰の道を説いたことでした。プロテスタントに共通する歴史にグリフィスは共感しました。

多くの僧侶及びその家族が高い教育を受けているという点で、（真宗は）おそらく他宗の僧たちを凌ぐ。門徒の僧幾人かと個人的に知り合ったことで、そう私は断言できる。

ですが、明治の真宗における教育熱は、実はキリスト教への強い警戒心によって活性化されたものでした。グリフィス自身それをよく知っていました。彼にとって真宗は、敬虔に生きる道を説く上で、よきライヴァルだったといえそうです。

3. グリフィスが語る、明治日本の宗教

開国した日本への伝道において、その大勢を占めたのはグリフィスの宗派をはじめとする米国・英国系のプロテスタント教団でした。ですから、グリフィスが「仏教におけるプロテスタント」と呼ぶほど自らに近いものを感じた真宗は、他の仏教諸派からこんな攻撃を受けたのだと彼は書いています。

彼ら（真宗）が敵（他の仏教宗派）によってかけられた最新の嫌疑は、あまりにキリスト教徒に似ている、いや完全に同類とみなした方がよいというものだ。

日本政府もキリスト教が国民に浸透するのを警戒していましたが、開国して国際社会に参加した以上、いつまでも布教を禁止しておけませんでした。信教の自由を認める社会において、キリスト教に対抗できる宗教を自認し、布教に最も積極的だったのが真宗でした。ただグリフィスには、キリスト教徒にとって真宗以上に手ごわい存在の姿も見えていました。

それが、日蓮宗です。

空虚な予言ではあるが、私は確信する。日本においてキリスト教は、最も活発で執拗な抵抗者をこの宗派の内に見出すだろうと。

日蓮の教えは「他と明らかに異なり、排他的」であるゆえに、他宗派の動向に関わらず孤高を持するだろうと彼は考えました。彼にとって日蓮は、信仰を人々に説く熱誠をかつて失っていた古い宗教へ「冷たい形式主義を免れるため必要となる、改宗の精神を注入」して活性化させた、偉大な宗教者でした。

「日蓮宗徒の邪教的迷信には胸の悪くなる粗悪なものもある」と書くグリフィスが、主にその宗徒によって行われている感動的な行事として詳述しているのが、「流れ灌頂（ながれかんじょう）」です。出産で亡くなった女性の魂の救済を願い、路傍に張られた布がすりきれるまで道行く人々が水をかけて通る行事を、彼は「母の追悼」と呼びます。

日本人は、あらゆる惨禍を現世もしくは来世の罪の因果だと信じている。母親が産褥の死を被るのは、そのような死に値する恐るべき犯行が、長く連なる過去生の輪のどこかにあったためなのだと。ゆえに彼女は生まれたばかりの幼子を残し、母としての喜びの忘我の内に、ハデスの闇に沈み、血の湖に溺れゆく。・・・

・ ・ ・そこで彼女はうめき苦しむ。「流れゆく祈り」が終わるまで。すなわち、着古される衣を象徴する布が使い古されるまで。

※ハデスはギリシア神話の冥界神

グリフィスは「流れ灌頂」の様子を実際に見て、感動したと書いています。彼自身、日本滞在中に故郷の母を亡くしていました。展示で紹介した、流れ灌頂の様子を描いた『皇国』の挿絵は、東京の画家で友人の大澤南谷によるものです。

それは身代わりの苦の物語、喜びの間際の悲しみの物語、死にゆくひとりと、もうひとつの生きる命との物語である。それは母の愛を、母の哀しみを語る。それは道行く全ての人へ無言のままに訴える。苦しむ靈魂の刑期を短縮する、神の愛を求めて。

グリフィスはキリスト教布教に対する日蓮宗の頑強な抵抗を予想した記述に続いて、「最後には、今まさに凱歌を上げつつある信仰（キリスト教）に屈するであろう」と樂觀的に書きましたが、明治以後の日本において国民の多くがキリスト教に改宗する時代は来ませんでした。政府がキリスト教を脅威とみなし、対抗者として真宗などの仏教教団に期待するという思潮も後退しました。近代社会を担う国民の育成を図って、学校教育による知識の普及・開化が進められると、死後の靈魂の救済自体を迷信視する精神も広まりました。まさしく、その近代教育の先駆者として福井に招かれたのがグリフィスでした。しかし、彼がその任に選ばれたいきさつは全て、異教の素朴な行事を目にして心を震わせるような一人の純粋な青年が、全世界の人々の救いを旨とする宗教の使命に目覚めた、その日にはじまったことだったのです。

（福井市グリフィス記念館）

仏陀が築いた宗教は、キリスト教の創始よりさらに六世紀の歳月を重ね、およそ人類の三分の一がその信仰を奉じ、おそらく他の宗教全てのものを合わせたよりも多くの文献を擁している。私はそれについて論じようという企てを、言葉の最も広い意味においてしか持ち合わせていない。この章の狙いは、日本における仏教の始まりと展開を描き、興隆と進歩について略述し、その最後の果実が見出される国、この動乱のさなかにある国においての、現状を示すことだ。

キリスト教徒はそれを破壊しよう、少なくともそれにとって代わろうとしてきたのだから、かの信仰を知ろうとしてしかるべきである。すでに仏教寺院がアメリカの地に建てられ、我が国の西部でこの古代の信仰が今尚キリスト教のライヴァルとして興らんとし、ボストンに、ロンドンに、ベルリンにおいてすでに崇拜者が、たとえそれが大学教授ではないにしてもいる、といった現状とみなせる中、この主題は直接的利害を持つと映るはずである。

仏教が全くの無神論の人道主義として発祥した時そこには、それ以前に異教が、いや以後においても、達成したいかなる高みにも勝る道德律と高邁な哲学があった。非常にはっきりした特徴は三つ、神がおらず、輪廻があり、カーストがない。現世と来世の抑圧に呪われた地で最初に説かれたそれは、カーストを認めず、全て人は等しく罪深き哀れな者であり、全て人は等しく罪と不幸から知識によってこそ解放され得る者だと唱えた。全て人には何物かとしての前世があり、この世での悲しみは全て前世で犯した罪に対する罰だと教えた。人の靈魂は数知れぬ存在が渦なす中をそれぞれぐるぐると回り続け、生と苦と死が連なり続ける長い道行の中に常にある。全ては束の間のこと。実在するものはない。この世も全てただの迷い。死後靈魂は生の舞台を移り続ける。高き者に上がったり、低きに下がったりしながら、長い時を経て、いつかたどり着くであろう涅槃、すなわち仏陀と同化する時まで。

真の信仰者たちが望むのは、その存在、個の人格、意識までが完全に消え去ることであり、その切望は苦しむ靈魂全て、つまり全ての人類のものということだ。仏教徒の中の仏教徒に言わせれば、靈魂の本当の居場所は、至福に満ちた滅却なのだ。仏教の諸道德は、その形而上学に優る。その戒律が述べていることは道德性の最も洗練された指令である。殺人、盗み、姦淫、嘘言、泥酔、不貞といった基本的な禁足事項の他に、「あらゆる悪、偽善、憤怒、高慢、猜疑、貪欲、噂話、動物虐待などの影の侵入を防ぐ特別な規定がある。推奨される美德として、両親を敬い、子をまもり、権威に従い、感謝を忘れず、栄えあらば穏やかに、試練には耐え忍び、いかなる時も心の平静を保つこと。その他にさらに、侮辱への赦しと、悪に報いるに悪をもってせぬこと」がある。その民の「習慣」は何であれ、彼らの聖なる書物の中に書かれ説かれた、上記要約したようなルールにある。

こうしたことどもは仏教の、我々がその落穂を拾い集められる、初めの頃の純粋なものである。そこには道德律と哲学的な教えの他は、ほとんど何もない。「教会組織」といえるものが、いかなる意味においてもない。その歩みは急速にして顕著だった。最終的にインドか

らは駆逐されたものの、ビルマ、シャム、チャイナ、チベット、満洲、コリア、シベリアと吹き渡り、終に十二の世紀を経た後に、日本へと入った。その時までには釈迦（仏陀）に起源するありのままの教義という裸身はすでに、アジアの想像力と僧職的必要とによって、まばゆい衣裳宝飾に装われていた。釈迦の思想が、普通の宗教というもののものもつあらゆる附属物を伴って、一つの完全な神学大系にまで拡張されていた。そこには巨大で複雑な聖職者と修道者の機構があり、地理的・感覚的に認識できる樂園があり、地獄と煉獄が絶対的にあり、悪魔たちは位階制度と肩書をもって住みなし、神学は最も定評ある様式で備え付けられていた。その中で僧侶たちは鍵を保持し、温度計を調節し、人々に与えられる痛みと喜びの、時間と度合いを測っていた。それだけ早い時期から、このシステムは細かい目録に分類された聖人伝を持っていた。来世論の輪郭ははっきりしていたし、彼らのミサにおいて金儲け式が流行っていても尚、教主には問答に熟達することがもとめられた。総会議が開かれ、法令が出され、教説は明確に決定され、あるいは廃された。仏教は哲学として現れ、宗教になった。仏教伝道団が日本に入った時には彼らは、無学な人々の恐れと希望をかき立て、攻勢に出る新たな信仰が人々を従わせる上で、全くふさわしい機構を備えていたのである。

仏教が大衆の宗教として成功するよう運命づけられたのではないか、そんな国があったとすれば、それは日本である。そこは宗教と呼べる何物にも、未だおかされぬ処女地だった。仏教が来る前には、宗教の名に値するものは無きに等しかった。日を追って、日本史の灰色の黎明期に新たな調査の光が降り注いでいる。明るみに出てきたことは、神道が亡き英雄と祖先の霊への供儀を本質とする、貧弱でおぼろげな崇拜でしかなかったことと、それが仏教の到来により、対抗しようという力をもって活気づいたことで、宗教体系に近いものになったことである。神道のバンテオンに群れ集うかそけき神々、人と同じ感情をもつ彼らはただ、歴史的英雄が神として祭られたものでしかない。その最も誠実な支持者・教師たちでも、彼らがめざす目的は政治的なものだ。ミカドの神性というドグマ、および全日本人が彼に絶対服従する義務、それらを取り除いてしまえば近代神道に残されているものなど、ほとんど無い。チャイナの創世記、地域的神話、儒教道徳、そのぐらいだ。※原注(1)

どこから来て、どこへ向かうのか、それはなぜなのか、という問いへの解答に、もし古代日本人の心が憧れていたならば――全ての人の心が疑いなくそうであるように、宗教的真実を切望していたとしたら――それは、神道の穏やかな空虚よりもずっと確かで、しっかりと感じられ、教条的な何か、を受け入れる準備ができていたということだ。仏教はその心に触れ、想像力の火を灯し、理知を給し、高邁な道徳律を供し、自制によって汚れなく生きることがを指示し、無知なる者を畏れさせ、疑う者を恐怖させた。衣食満ち足りたアングロサクソンにとっては、意識あって存在してこそ喜ばしき忘我というものであろうから、彼らの靈魂は永遠の生を求めこそすれ、存在も個の人格も完全に同化することに人の靈魂が憧れるなど、たとえそれが神とであったとしても理解の外であろうし、まして完全なる滅却などは論外であろう。

だが、アジアの貧しき人々にとっては、人生は休む間もなく働きづめなのが普通であり、

生活は野菜が常食で活力に乏しく、政治は主に徴税者たちによって代表されるものでしかなく、地震と台風は実に頻繁でおそろべきものであり、自然の力が悪意ある霊として怖れられている、そんな人生は、彼らに靈魂の永続を願わしめるほど魅力あるものと映りはしないのだ。普通の日本人で、解説もなく「神は永遠の生を賜う」とか「私を信じる者はすべて死後も生き続ける」と告げられて感動に震える人など、ありはしない。そうした言葉は彼にはただ、重い宿命を告げられるという、苦でしかない。彼にとって生が怖るべきものであるのは、その終わりに死があるからではなく、死にはそれに続く誕生と再びの生があり、生と死の二つは終わりの見えないほど続く連鎖にすぎないからだ。ここに、仏徒の説教の力がある：「真の教えを信じ、真の信仰をもって生きなさい」。僧いわく、「そうすればあなたは、より高位の存在に生まれ変わり、さらに上へ、上の天へと上ったすえ、極楽に至り、純化した聖なる魂となって、仏様の懷に迎えられますのです。真に背を向け、偽りの教え（キリスト教など）に従うならば、何千回も生まれ変わり、ただ病と苦と災いを受け続け、何千回も死に、あるいは殺されて、やがては地獄を下へ、下の地獄へと、沈み続けるのです。上へ上る機会が訪れるまで、ずっと」。これが本当に、輪廻に関する釈迦の教えとして大衆の間に広まっているものだ。日本の民間仏教は少なくとも、外国で思考されて著された悟りの道そのままとは、とても思えない。これは人をとらえる本物の宗教だ。彼らと父祖の神々をつなぐ絆だ。このかたちの仏教は日本で、賢者からも無知な田舎者からも、よい印象をもたれた。彼らにとって思想は不幸である。その絶対性、その道徳、その報い、その罰ゆえに。

仏教においても宇宙の成り立ちがあり、小宇宙と大宇宙の理論がある。その内には十全なる「科学」があった。我々が中世の神学者たちが聖書に見出したものと、少なくとも同じ程度には。その高い知性は高貴な魂に憧れさせた。知識によって、その秘密を探り得たい、己が欲情の克服を遂げたいと。

だが仏教の様々な宗派において、その涅槃の教えの理解もまたきわめて多様である。人の魂は全く実在しないし、意識は完全に滅びるのだと信じる者があれば、反対に、人の魂は全なる神の一部となりながら、その限りで意識と共に個の人格も享受すると考える者もある。

迫害や妨害は最初に新たな信仰を奉ずる者を結束させるが、成功と繁栄は分派を生じさせるものだ。新たな宗派が日本に開かれたのは、多くの僧がコリアやチャイナに渡り、新たな光、改革者として帰国し、思想と礼拝の新派を開いたからだ。そのうち最も名高き者が弘法であり、彼はパーリ、サンスクリット、漢語に通じるだけでなく、卓越して徳高き仏僧であり、日本語のアルファベット、すなわち、いろはにほへと全四十七音、読み分け記号を付すと七十に上るが、その字音表の編者でもある。カタガナはかしこまった書体、ヒラガナは筆記体である。弘法は西暦紀元 774 年に生まれ、835 年に亡くなった。寺院を建て、シンゴン（真の言葉）という宗派を開いた。彼の時代には八つの宗派があったが、そのうち今も健在なのは二つだ。

キリスト教の第十三世紀が、日本仏教の黄金の世紀である。思想がそれぞれ特有の諸相へと展開し、今の日本でなお最も繁栄している諸宗派が、そのとき開かれた。その大半は京都

において。1202 年のゼン（黙想）宗、1211 年のジョードー（天国の道）宗、1262 年のシン（新）宗、1282 年の日蓮宗などである。その世紀の各時代に他にも重要な宗派がいくつも開かれた。聖職を荘厳した眩い知性の数において抜きん出た時期である。紙幅の限られる中、その内の二人だけ名前を挙げておきたい。【後半へ続く】

原注より

日本の仏教徒に関する正確な統計を得るのは極めて難しい。掲載した表は東京の築地にある西本願寺の学識あるシン宗の僧が、私のためにまとめてくれたものだ。私はこれを、福井の元僧侶や様々な平信徒から提供されたデータと比較してみた。

日本の聖職者たちの中心地は、常変わらず京都である。諸宗派の主な寺院・僧院がその地にある。

日本仏教宗派表

主要な宗派			寺院総数
I. テンダイ	開祖智顗、チャイナ	3 派	6,391
II. シンゴン	開祖弘法、日本、西暦 813 年	3 派	15,503
III. ゼン	開祖達磨、日本	6 派	21,547
IV. ジョードー	開祖法然、日本、1173 年	2 派	9,819
V. シン	開祖親鸞、日本、1213 年	5 派	13,718
VI. ニチレン	開祖日蓮、日本、1262 年	2 派	
VII. ジ	開祖一編、日本、1288 年		586

上記の他に、「非正規」「地方的」「独立系」の宗派が二十一あって、他派と別々に活動しているが、寺院・僧院をもっていなかったりもする。他にもたくさんの宗派が日本で興り、一時は栄え、廃れて、消えていった。1872 年のセンサスでは、日本の仏道修行者は男女すべての階級等級占めて、211,846 人。その内、75,925 人が住職・修道僧および院長、9 人が女子修道院長。37,327 人が見習い・学生の数に入り、98,585 人が僧院か家庭（大半シン宗）にある。男性が 151,677 人、女性が 60,159 人で、尼僧は 9,621 人。1875 年のセンサスで報告された仏道修行者は 207,669 人、内男性が 148,807 人、女性が 58,862 人である。

訳注：グリフィスは浄土宗を「浄道宗」、浄土真宗を「新宗」と解しているようなので、各宗派名はカタカナで表記しました。

1222年に安房州小湊の郊外に生まれた運命の子供は、数百万の信仰心を感化し、その個性と知性は消され得ぬ印象をその国民の心に残すこととなった。彼が開くことになる仏教の新宗派は、日本最大、最も富裕で最も影響力のある宗派の一つとなり、改宗への熱情、論争の激しさ、宗派的偏屈さ、偏狭な傲慢さにおいて他派の全てに勝るものであった。日蓮宗は、その六百年の歴史において、おそらく日本における他のいかなる宗派にもまして多くの、輝かしき知性、妥協を知らぬ熱心党、怯むことなき殉教者、容赦なき迫害者たちを輩出してきた。これほど論争を好む宗派も他にない。改宗熱、神学論争の激しさ、悪口の毒、意見や慣習の異なる者に悪罵を浴びせる力において日蓮宗の僧たちに敵う者は他派にいない。彼らの見解では、彼ら以外の宗派は全て無益なものである。彼らの語彙では真言宗の信者は「国に背く者」で、律宗の者は「盗賊、悪党」で、禅宗ならば「狂暴の徒」であり、自派以外の者たちは疑いなく必ず地獄に落ちるのだ。日蓮宗徒には、経本と太鼓、それ以外にも信仰復興に付き物の騒がしい伴奏が、他派よりも多く見受けられる。巡礼の数や、お守り、お呪いをよく使うことでも他派をしのぐ。その僧は独身で、酒・魚・あらゆる肉食を慎まねばならない。彼らは仏教におけるランターズ（訳注：原始メソジスト）なのだ。今日においても、ある寺院における信者たちの集会は、耳を聳するばかりの物乞いさながらの様相を呈する。絶え間なくお経を繰り返し唱え、休みなく太鼓をたたき、忘我の叫びを上げる者は興奮のあまり気がふれることも、時には死に至ることもあり、僧も間違いじみた訓戒を発し、宗教の袈裟を求める度を越して手に負えぬ様は、他国に見られるものに勝るとも劣らない。この宗派に属するのが加藤清正、十六世紀の忌まわしきキリスト教徒迫害者であり、イエズス会にとってはまさに呪うべき男であり、仏徒の暦においては今も聖徒の列に加わっている。

ニチレン（太陽の蓮）は、太陽（ニチ）が体の中に入る夢を見て懐胎した母が名づけた。この話は日本の偉人の母のものとして他でも語り伝えられており、後に名声・高德の人となる子供を孕んだ女性の御宿り信仰として好まれているようだ。少年は山と波と陸の壮観に囲まれた地で、果て無き太平洋を前にして育った。空想的で、瞑想的な子供だった。早くから高德の僧の元にあずけられたが、成人する頃には古い教義の多くを無用とみなし、他派の教えにも満足せず、自ら一派を立てんと決意した。信者たちがくもりなき真理を護持し、模範となる宗派を。

日蓮はインドからもたらされた、サンスクリットや漢文で書かれた仏教の古典・経本を深く学んだ。仏教の完全な正典は様々な時代にインドやチャイナから招来され、また日本で漢訳されていた。それまで、日本の全仏教徒の一般的な祈りは「南無阿弥陀仏」（永遠の仏陀よ、我等を救いたまえ！）だった。日蓮は、本当の祈りの言葉は「南無妙法蓮華経」（救済をもたらす法典に栄光あれ。一語一語の文字通りにすると、救済の真実の道）だと教えた。この祈りは今でも、日蓮宗とすぐに分かるものとしてある。その文字は寺院の幕や、墓石、路傍の廟などに見られ、その宗派の猛き武士が海戦陸戦にのぞんで高々と掲げる軍旗に書

かれはためきもした。この文言は、主要な正典の一つであり、あらゆる宗派において使用されるナマー・サッダルマ・プンダリカ・スートラの漢訳である。日蓮は真にして唯一の救済の道をその内に見出したと唱え、他者は釈迦の教えを正しく説いていないとした。彼は自らの説く道のみが、真にして唯一のものだと宣言した。

日蓮は多くの寺院を創建し、追放中の身でない間は、教えを説き、語り、触れて回ることに忙しい人生だった。彼は「安国論」という書を世に出した。他宗を攻撃するその激しさは、多くの敵対者を喚び起こした。彼らは鎌倉の権力者、執権北条時頼に対し懇願した。公安を破壊する者、実際には高德の人だった、その男を黙らせるようにと。

日蓮は伊豆の伊東岬へ追放され、三年間その地に身を置いた。解放後、彼はその弁舌を控えるどころか、以前にも増して鋭い舌鋒を他宗に向け、特に過去の偉大な学識ある僧侶たちを非難の対象とした。北条時頼は再び彼を拘束し、地下牢に閉じ込め、死を宣告した。

以下は彼の信奉者たちの信仰熱の内にある話である。その日、彼は鎌倉の湾岸に美しい江の島をのぞむ、ある村へ連行された。腰越という村である。その時、日蓮は四十三歳だった。浜辺に膝をつき、その高僧は穏やかに祈りの声を発し、彼のロザリオの祈りを繰り返した。

「南無妙法蓮華經」。剣士が刃を振り上げ、力いっぱい振り下ろした。突然、目もくらむ光が空を破り、処刑人と、落ちた首を見届ける役目の検視官を打ち据えた。白刃は砕け散り、高僧に傷はなかった。その同時刻、鎌倉の主、北条時頼は宴のさなか、突如響き渡る雷鳴と稲光に虚を突かれた。その空には、雲一つなかった。天の不興の恐るべき徴に茫然となった北条時頼は、これは聖なる犠牲の故だと察して、処刑人の手を止め刑の執行を延期するために、すぐさま急使を遣わした。血だまりの穴が汚されぬままなのを見届けた検視官が、剣の触れえぬ聖人の処刑延期を請う急使を走らせたのも、また同時だった。互に逆の方向から来た二人の男が出会った所が、今も鎌倉から江の島への道に行く旅行者が渡る小川で、この日の故事に因み行合川と呼ばれている。鎌倉の主の息子、北条時宗の情けあるとりなしにより、日蓮は佐渡へ遠島となった。後に解放されたのも、彼の恩人の大赦令によってだった。日蓮が京都に建てた彼の宗派は、弟子の日像上人に守られて大いに繁栄した。多忙で神聖なものだった生涯の後、偉大な聖人は池上で死を迎えた。横浜東京間の鉄道駅、川崎から北西へ少しの所であり、蒸気機関の叫びとガタゴト揺れる車両の音が微かに聞こえるぐらいの、厳かな落ち着いたきの中にある。豪華な仏殿、仏塔、お堂や壮大な墓廟が見られるだろう。日蓮の死によってその地は特別な聖所となったが、遺骨は生前の住まいの一つだった、甲斐州の身延山にある。口絵参照。

日本にいた間、私は日蓮ゆかりの地として広く知られる場所を訪ねようと足を延ばした。彼の誕生、労苦、偉大な成功、そして死。それらの場所で感じ生じた、彼の仕事と信者たちへの印象を、私はこの章にて述べた。私が判断できる限り、日本の宗教的知性にこれほど深く自らの痕跡を残した現地の神学者は、日蓮を措いて他に無い。空虚な予言ではあるが、私は確信する。日本におけるキリスト教は、最も活発で執拗な抵抗者をこの宗派の内に見出さだろうと。そして最後には、今まさに凱歌を上げつつある信仰に屈するであろうと。その信

仰が世界を取り巻く勝利の帯は、日本において留め金をかけられるのではないだろうか。

彼らの驚くべき成功と恐るべき力の源は、彼らの不寛容と頑固さが起因する所――彼らの師の教えは厳密で、他と明らかに異なり、排他的だった―と同じである。彼らの聖なる書、その僧たちの説教において、日蓮宗徒は勧奨された。選ばれし宗派たる彼らのみが賜る特別な祝福を考え、よくよく努めよと。他者は全て彼ら以上の恩恵を受けることはなく、彼らの教義こそ唯一真正のものであり、他の方法や体系では完全な救済など得るべくもないことを理解せよと。他の仏教徒と兄弟の交わりを結ぶなど不可能に近く、たとえ他の宗派全てが一つになろうとも、彼らだけはその教義が受け入れられない限り、孤高を持するに違いない。他の宗派を追い出すとか、日蓮が宣伝手法として導入した悪口罵倒の利用は、日本ではかなり目新しいものだった。それは新たな信仰とその信者に対する迫害を引き起こした。征服されざる不屈の精神と信者の熱誠がまたそこに連なる。つまり、その種はその土壌でこそ芽吹くというものだ。

その時代、日蓮が開いたそれは、日本における仏教の第二のリヴァイヴァルと呼びうる。十三世紀の開幕において、すでに受け身の静けさの段階に達していた偉大な宗教は、それが不純な淀みと冷たい形式主義を免れるために必要な、改宗の精神を注入されたからである。

日蓮の成功は熱情と頑迷の時代を開いたとはいえ、国民の宗教的生活の最良の見本となる活力において、生氣を呼び覚ました。我々が仏教を偽りの宗教と呼ぶか真正のものとするかに関わらず、どれほど日本人について学ぶことの浅い者であっても、日本の民衆の純粋に宗教的な性質、同じぐらい迷信的ではあるが、その性質を育て発展させたものとして、仏教ほど大きく影響した力是他に一つもないことを、承認するに違いない。

日蓮宗徒の邪教的迷信には胸の悪くなる粗悪なものもある一方、彼らの信仰による風習の中には、ナガレ・カンジョー（流れゆく祈り）というものもある。それを私が呼ぶならば、「母の追悼」だ。他宗に見られないわけではないが、主に日蓮宗徒によって行われている。

その光景を都市ではあまり見かけず、必然的に郊外や田舎で目にすることが多いのが、「流れ灌頂」だ。小川のほとり、都市部ならば良い身分の家が並ぶ水路際といった所に、一枚の綿布がその四隅に立てた杭から吊るされている。後ろには木摺りのような板が高く立てられ、天辺近くに数度刻み目を入れられた、その板には短い銘文が書かれている。川辺の布の上には、都市部なら水桶の中にだが、木の柄杓が一本置かれている。おそらく四隅には、立てた竹に生けられた花束がある。不注意な旅行者は気にも留めない奇妙な物でも、少し考察すればそこに死を象徴する意味が現れる。背の高い木摺りの銘板は、お墓の陰に立てられているものと同じだ。梵字は不吉に死を予示している。開いた花々でさえ、墓地の記念碑のソケットに納められた、死者を愛する生存者の愛情こもる追憶の供え物を思い出させる。布に書かれているのは死後の人格に与えられた名前と、「南無妙法蓮華經」の祈りだ。ずっと待っていると、おそらくは数分もすれば、通行人が立ち止まり、数珠を手に敬虔な祈りを捧げつつ、恭しく柄杓一杯分の水を汲み、布の上に注ぎ、水が布を濾過するまでじっと待ってから、立ち去っていく様子を目にすることだろう。

その全ての深い意味を知る時、それはとても感動的なものだ。それは身代わりの苦の物語、喜びの間際の悲しみの物語、死にゆくひとりと、もうひとつの生きる命との物語である。それは母の愛を、母の哀しみを語る。それは道行く全ての人へ無言のままに訴える。苦しむ靈魂の刑期を短縮する、神の愛を求めて。

日本人（仏教徒）は、あらゆる惨禍は現世もしくは来世の罪の因果だと信じている。母親が産褥の死を被るのは、そのような死に値する恐るべき犯行が、長く連なる過去生の輪のどこかにあったためなのだと。ゆえに彼女は生まれたばかりの幼子を残し、母としての喜びの忘我の内に、ハデスの闇に沈み、血の湖に溺れゆく。そこで彼女は呻き苦しむ。「流れゆく祈り」が終わるまで。すなわち、着古される衣を象徴する布が使い古されるまで。水はけにたえないまですっかり布が使い古されて、すぐに水が下に抜けて落ちる時、罪を浄化された母の霊は解放されて上昇し、高き存在の輪の中の貴き者として復活する。信心深い男たちは、通り過ぎる時に恭しく一汲みの水を注ぐ。女性たちは、特に母となる痛みを知り、愛し児の命を授かった人たちは、より深い思いから贖いの行為を繰り返す。同情の深さを測り得るのは、母となりながら先立たれてしまった人たちによってのみであろうが。しかし、自然の荘厳な輝きを前に恭しき視線を凝らしていた者は、物乞いが騒がしくせがむ声によって衝撃を受けた。こんなにも悲しく心震える追悼を前にしての、僧たちの下劣な企みの証によって、その光景が異邦人の心にさえ呼び起こした憐れみの情は、冷まされてしまった。

祈祷と故人の名を記した綿布は寺院からのみ、効き目のあるものを購入できる。私が聞いたところ、それは秘密でも何でもないのであるが、富める者は二、三日で伸びきって破れて水がすぐ落ちるようなナプキンを手に入れることができる。貧しき者は、丈夫できわめて密に織られた布地しか手に入らない。罪滅ぼしの苦行の限界は縦糸と横糸により定められ、縦糸と横糸の基準は金銭によって測られる。金持ちのナプキンは、真ん中が擦れて薄くなっている。だが貧しき母たちの方が、より豊かな憐れみを身分低き庶民たちから捧げてもらえるのは、日本では、他の国でもそうだが、貧困は子沢山に恵まれ、富は相続人を失って嘆くものだからであろうし、また母としての悲しみと喜びを味わった女たちは、富者の豪邸の中よりも、卑しき暮らしの内にあった方がいっそう、憐れみを誘うものだからであろう。

越前では、特に田舎の町や村において、この風習が厳格に行われていたが、東京で流れ灌頂を探した私はついぞ、それを目にしなかった。都市も場末であればおそらく見られるとのことだ。越前の武生の近くで見たものを、友人のアーティスト大澤が私のために線画にしてくれた。この作品でご覧に入れる多くの素描が彼のものである。

日本仏教におけるプロテスタント、それは1262年に親鸞上人が開いたシンシユウの信者たちである。親鸞はジョードー宗を開いた法然の弟子で、高貴な生まれだった。京都にあった、三十歳の時に彼は、関白の娘という高貴な血筋のタマヨリ・ヒメ（訳注：玉日姫）という令嬢と結婚した。そうすることで彼は、訓示によるだけでなく、例をもって示したのである。結婚は誉であり、不婚は聖職者の発明であって、純粹仏教にそれを正当とする根拠はないのだと。苦行、断食、節食規定、巡礼、また隠者となるにしろ僧院に籠るにしろ、社会

との絶縁、そして一般的なお守り・お呪いの類、これら全てがこの宗派においては、タブーとされる。その寺の境内では僧院も尼僧院も未だ知られない。修道僧の隔離生活に、家族がとって代わる。求められるのは、敬虔な祈り、清らかさ、まじめな暮らし、そして、完璧な高潔さをもって勤める唯一の存在たる、仏陀を信ずること。他宗は勤めによる救済を説く。親鸞は、信ずる者の救済を成し遂げてくれる仏陀を信じ切る、それが信仰なのだと説いた。

仏教は、それを考察した外国人には大抵、キリストなきローマン・カトリックに見える。アジア的な形体といってもいい。シン宗はプロテスタント、信仰義認説であり、イエスの代わりに仏陀を信ずるのだ。一意専心が、この宗派を特徴づけている。外部の者はそれを、彼らの主要な教本である「無量寿経」（誠実で堅固な人生についての本）の最初の単語から、「一向」と呼ぶ。彼らの組織のまとまりに関連して、「モント」（門-信徒）と言う者もいる。他宗の経典は梵語か漢語で書かれていて、読めるのは学識ある者だけだ。

門徒の方は、現地の日本語で表現され書かれている。他宗では寺院を山中の閑雅な場所に設ける。シン宗徒は都市の真ん中、目抜き通りの、人の一番集まっている所に建てる。彼らは万策手を尽くして人々を彼らの元へ誘おうと努める。福井において彼らの一对の寺院が建っていたのも、それぞれ往来の最も多い通りだった。東京、大阪、京都、長崎、他の都市でも、市街地の中心に一对の寺院という同様の方式がとられ、宗教団体の建築物の中で一番大きくて立派なのは、その二寺院である。祭壇は堂々たる大きさの荘厳なもので、細部まで豪華だ。俗に「門徒の仏壇並みの見栄え」と言う。僧侶は結婚し、家族を養い、子息が後を継いで寺を守る。男子が子孫にいない場合、娘がいるだろうから、その夫が義父の務めを襲う。多くの僧侶及びその家族が高い教育を受けているという点で、おそらく他宗の僧たちを凌ぐ。門徒の僧侶たち幾人かと個人的に知り合ったことで、私はそれを事実として断言できる。

これまで親鸞の信者たちは高い地位につき、国民の宗教上の発展に巨大な力をふるってきた。善きにつけ悪きにつけ、宗教のために最も積極的に活動した人々の中に彼らがいる。戦乱の時代、門徒の坊主たちが一族郎党と共に武装し、自らを軍隊として編成した例がたくさんある。彼らの軍事行動については次章以降でさらに知ることになろう。

親鸞没後は、1500年に亡くなった蓮如が門徒の信仰復興者となった。彼が書いた聖なる手紙「御文」は今も、宗門の弟子たちにより日々読まれている。大衆の元に届けるという彼らの特色をなす目的から、通俗的書体であるヒラガナで書かれているため、男女とも誰でも読むことができる。他宗徒から大いに迫害されながらも、彼らはその数を、富を、力を増し続け、今や知性と影響力とにおいて全ての先頭に立っている。妻帯、飲食など在家とほとんど変わらない彼らの生活を不浄だと言い立てる他者に対し、彼らは穏やかに答える。等しく降り注ぐ陽光のように。明らかに人間にその必要があって創造されたものを、我々は不浄と呼んだりはいしない。高潔さとは、飲食にあるわけでも、憂き世の衆生が恵み賜りしものへの禁欲にあるわけでもない。我々が蔑ろにしていると非難される規範や了見の狭い教義は、みな人の愚かさや虚ろさより生じたものにすぎないのだと。彼らは主張する。家族をもつ僧侶

は、僧院の独身者よりも純正だと。社会の純正さは、妻帯した僧侶によってこそ支えられるのだと。過去二十年、彼らは真っ先に外国に倣って神学校を組織した。その若者たちは、神道やキリスト教に対抗できるように、真実がいずれにあるかをきちんと比較判定できるように、鍛えられてきたことだろう。彼らが敵によってかけられた最新の嫌疑は、あまりにキリスト教徒に似ている、いや完全に同様とみなした方がよいというものだ。思想の自由。行動の自由。政府、伝統、過激な聖職者、神道—それらの影響力からの解放を求める、抑え込まれることなき願い。一言でいって、プロテスタンティズム、純正な意味でのそれが、親鸞が開いた偉大な宗派の特徴である。

教義の違いや、異なる宗派で様々である慣習までとりあげれば、まるまる一巻を要する。日本仏教には研究に値する内容が十分にあり、それだけで一本の学術論文ができる。※原注
(2) この後の世紀において、仏教の大宗派が国民の歴史劇の中で演じた役割については、我々の物語の内において続きをご覧に入れることとなろう。

原注

(1) 「神道というものの内に何があるのか、私は長い間それを見つけ出そうと努力したが、徒労に終わった。得られたものは神道のお祈りをつづった一冊の小さな本だけで、それによれば人は犯した罪の穢れを洗い流さねばならないものとされていた」。 J.C.ヘボン

「言葉のもつ厳密な意味において、神道とは宗教ではない」。「それがかつて一つの宗教として名づけられたものかどうか判別は難しい」。「むしろ日本人が独自に発明したもののように見える」。 S.R.ブラウン

私自身の印象は、1871年にインディペンデント紙に記事を書いた時から、さらに五年の考察と、諸々の賛否両論の検討を経た今でも変わっていない。「その高度な形体においても、神道はやはり無神論が洗練され知的になったものでしかない。低い方の形においては、ただ政府と聖職者の命令に盲従することである」。私が福井と東京で聞いた現地の学者たちの意見は、神官職の人のものも含めて、以下の見解で一致した。「神道は宗教ではない。それは政府による規制の体系であり、民の愛国心をひからびさせないためには、とても都合のよいものなのだ」と。この恐るべき政治上の道具が有効に、全くもっともな理由で利用された様が、「日本における最近の革命」と題した一巻最終章においてみられるであろう。

(2)より 日本国民が仏教信仰に改宗するのにどれだけの時間がかかったのかは、とことん調査し十分検討する価値のある問いである。・十四世紀ごろまで仏教は、官・軍・有識階級の宗教のままであり、広く国民一般のものとなっていなかった。全階級がそれを受容したことは、親鸞と日蓮、北国・東国へ追放された彼らが教えを説いて巡る使徒となった、そのはたらきに帰せられるだろう。親鸞は京都から北・東の諸州を全て歩き、教えについて話し、示し、新たな弟子たちを得て、その流刑を栄えあるものとした。日本国民が物神崇拜および神道から仏教に改宗するのに要した時間は、九百年というのが誤りのないところであろう。

日本古来の宗教をカミ・ノ・ミチと呼ぶ。(神々の道あるいは教え、言わば、神学)。漢語にするとシントーである。外国人は Shintoism、または Shintooism と呼ぶ。神道について、とはっきり述べている論者のほぼ全てが、仏教やチャイナ哲学との接触によって純粋ではなくなった形体、十六世紀以来知られてきたものしか描いていない。この章の狙いは、純粋な古代神道について、輪郭だけでも提示することである。その伝統と教義の基礎について、一つの素描は得られた。神道寺院はミヤと呼ばれるが、仏教の圧倒的影響を被りながら、その儀式とドグマの純粋性を保持したところのごくわずかだ。

日本神話において、宇宙とは日本であり、日本に関すること以外は物語から排除されている。神性ある者はおそらくわずかな例外を除いて全て、歴史上の人格を映して、宇宙の成り立ちと天上の系譜が総体的に結論するものは、ミカドは天と地(日本)を創造した神々の子孫であり代行者だということである。故に、全て日本人は彼の命令に従わざるを得ない。この原理は宗教省が要約し、1872年には帝国中に布告された戒律として以下の如く示された。

1. 汝、神々を敬い、国を愛せ
2. 汝、天の理と人の道を明瞭に理解せよ
3. 汝、ミカドを最高君主として尊び、その政府の命に従え ※

その主要な特徴は、諸々の声明の内に残されているが、先祖崇拝と、皇帝、英雄および学者たちの神格化である。人格化された自然の力への崇拝が、そこに大きく入り込んでいる。この崇拝には偶像、肖像の類を用いない。その象徴となるのは鏡と御幣—木製の杖から垂らした、刻みの入った白い紙片である。靈魂の不滅を説く教義は無いが、そこから派生したらしいドグマは容易に見て取れる。全て人(日本人)は不滅の神々の子孫である、と。現地における人という言葉の由来は、hito(“光を持つ者”)であり、ミカドの明白な相続人の古い称号は“光を継ぐ者”だった。火と光(太陽)は最も早くから崇拝の対象としてあった。

神道は道德律を持たない。倫理・信仰を厳密に定義した体系も持たない。信者を導く主たる原理は祖先の名誉ある行いに倣うことであり、その子孫にふさわしいことを生活の清らかさによって証するのである。彼らの神話における突出した特質の数々は、彼らの導きとなる格言に認められる。それが表すのは不浄のあらゆる形を甚だしく忌み嫌うこと、顕著なのは身を清める儀式に満ちていることである。誕生と死は特に汚れとなる。古くは、死体や産褥の婦人には離れ家をあてがい、事が済むと燃やしたのであった。神官は、式の前には沐浴して清潔な衣服を身に着けねばならず、自分の息が供物を汚さぬように紙片を縛り付けて口を覆わねばならない。清めのために多くの特別な儀式が挙行されるが、その場は先ず塩を撒いて清められ献じられた。家と土地は死によって汚されたので、葬儀に出た者は必ず塩を用いて身の汚れを祓うのが常である。古代の皇帝と神官は実際に諸州において、民の身を水

で清め汚れを祓う式を行った。後には年に二度、清めの儀において、民を表す人形の紙を川に流した。国民の過去六か月の罪を洗い流す寓意である。さらに後には、ミカドは京都の宗教長官を代理に立てて、全国の民のための象徴的行いを成さしめた。

身内に不幸のあった家族は世間の交際一切を断たねばならず、宗教行事にも参加せず、もし官職にあったならば、決められた日数は仕事をしてはならない。

感謝も、歎願も、罪の償いも、賛美も、全ては神々への祈りにおいて表され、それは両性から捧げられる。皇帝と貴族はしばしば境内に会し、神への賛歌、聖なる詩をつくる。祈りにおいてはたいてい手を二回打ち、頭を下げるか膝を折るかして、願いは沈黙の内になされる。参拝者は神殿の中には入らず、その前に立って、最初に綱を引く。綱はスレイ・ベルを巨大にしたような一對のゴングからぶら下がっていて、それで神様の注意をひくのである。祈りは口から発せられずとも、思えばカミに聞き届けられると信じられている。人の耳に向けられたものではないから、雄弁は不要である。ミカドは宮殿で日々国民のために祈りを捧げているが、それは彼の臣民が捧げるよりも有効だ。手を洗い口を漱ぎ、参拝者は祈りを繰り返す。例えばこんな風に：「神よ、天に坐します、知的にも物的にも神性たる、神々の主宰よ。我らを罪と罰から守り、邪を祓い、不浄を清め給え。我らが願いを、聞き届け給え」。あるいはこんな風に：「畏みもうす。知らず知らず私が犯し、あなたが目にし耳にした、私の過ちを正し給え。邪神が招く災いを祓い、清め給え。巖のように堅固に末永く、我が身を生かし給え。あなたの息吹と共に、私の日々の願いが、天つ神、国つ神の元に、疾駆する仔馬の聴き耳に入る如くに、聞き届けさせ給わんことを」。

それぞれ神殿の前には鳥居が立っている。二本の直立した木の幹からできている。そのてっぺんに滑らかな木が渡され、端がわずかに突き出ている。その下に小さめの水平な貫が渡されている。神々に捧げられた鶏が上に止まっているが、これは食用ではなく、夜明けを告げる者としてである。何世紀も経つと鳥居の元の意味は忘れられ、門だと思われるようになった。仏教徒は貫に額を取り付けたり、柱を塗装あるいは銅張りにしたり、笠木を曲げたり、素材を石や青銅にしたりして、その性質を変えてしまった。端をつなげた二つの十字架にも似て、鳥居は風景の中で見栄えのする、日本建築の純粋なオリジナル作品である。

ミヤは全て、厳しい簡素さを特質とし、白木で建てられ、茅葺きだった。漆など塗料を使わず、金メッキもせず、おおよそけげばしい装飾で飾り立てることがなかった。それは神聖な建物を汚すことであり、金属の使用も避けられた。その中では、御幣と日々の供え物しか見えなかった。最も神聖な木の棚の中に、木の箱があり、その中に「尊き神霊の代物」あるいは「神の種」が収められていて、その神殿が祀る固有の神が、そこに宿っていると信じられている。神霊の代物はたいてい鏡であり、人目にさらされている神殿もある。神道の最も重要な神殿は伊勢にあり、その鏡はアマテラスからニニギに授けられ、天上からもたらされてそこに祀られたのである。現地には、その鏡こそ女神自身だったと断言して書いている人も、単に彼女の代理だとしている人もいる。日本にある他の全てが、これをオリジナルとする模造・複製品である。

神道の神官は身分に応じて任じられる。彼らはカンヌシ（神殿の守り手）と呼ばれる。皇帝から称号を授かることもあり、高位の神官職は宮廷貴族である。彼らは、言葉の最も厳密な意味において、政府官僚である。宗教長官の職は中臣家の世襲である。通常の身なりは他の人と変わらないが、儀式の時は白衣をまとい、宮廷では宮廷服を着ている。彼らは結婚し、家族を養う。ひげを剃らない。役職はたいてい世襲である。神社では、乙女の神官も奉仕している。

神道の主張を吟味した外国人たちは、現地において、現地の言語、その聖なる教本と注釈者の援けを得て行った調査全ての後に、その多くが決めかねている。果たして神道が「真に日本の地で生まれたもの」かどうか、また、儒教の時代より前の古いチャイナの宗教と同類ではないのかどうか、を。それら所見の秤は後者の方に傾いている。日本神話の多くがほとんど正確にチャイナのそれに似通っているのは確かだ。宇宙創生譚も大部分変わらないまま、より古いチャイナの文献から見つかる。古事記（日本の神道信仰者のバイブル）は物語に満ちているが、訓示が並ぶことも、道徳や教理が説かれることもなく、儀式次第を定めてもない。神道は、我々が理解するところの宗教というものの特質を、ほとんど持ち合わせていない。神道についての最も学識ある現地の注釈・解説者として代表的な人物も、神道には道徳律が無い、という見解をはっきりと持っている。近代の偉大な神道復興主義者である本居は、神学論争の語勢を持って、以下のように説いた。道徳はチャイナの誰かが発明したもので、それは彼らが不道徳な民だったからであり、対して日本では道徳体系が必要なかったのであって、なぜなら日本人はみな自らの心とさえ相談すれば、正しい行いができたからだ。善き日本人の義務をなすものは、ミカドの命令に、それが正しいか誤りかを問うことなく従うことだ。君主の性格をあえて論ずることは、チャイニーズのような不道徳な民のみにあった。古代日本人の間では、政府と宗教は同じものだったのだ、と。

※原注

この章では、単なる意見・推測は排除して、事実のみをあげることに注意を払った。私が依拠した以下の見解の持ち主は、コスモポリタンな教養に恵まれた紳士と、その地において熱心に神道について学んだ人たちであり、彼らの研究と、その偏見にとらわれぬ物言いは、傾聴に値する。

「神道がどういうものか、本居が詳しく述べているところをみれば、それは民を精神的隷属状態に落としておくための道具に他ならない」。アーネスト・サトウ、イングランド人。日本学の第一人者として健在。神道を専門的に研究。

「神道がチャイニーズの古代宗教にきわめて似ていることには、確かな証拠がある」。「古代の神道と、現代のミカドの宮廷の著述家によって開発された教義との間には、はっきり一線を引いて考えるべきである」。「剣と龍、テウルソス杖と木蔦、アスクレピオスの杖と蛇、そ

れらと同じ意味合いを持っているのが日本の御幣だということは、まったくありそうなことだ。シーボルトが言っているように、それは二つの要素、男性と女性との結合を象徴したものだ。日本人が語ってくれた天地創造の物語は、チャイナとインドの神話にきわめて似るところがあった。それら（象徴と神話）が西方から取り入れられたことに、ほぼ疑いの余地はない。それがいつなのかは定め難いとしても、西洋の諸国民が理解するところの宗教というものの性質を、神道に与えたものについて知られるところはほとんどない」。フォン・ブラント、ドイツ人。ドイツ帝国前駐日公使で、現在は北京に異動。日本考古学の研究者で、日本のドイツ・アジア協会創設者。

「概して日本人は、神道とは何なのかについて述べようとする、困ってしまう。だが、そのような事情は明瞭だ。それが、かつては土着の信仰としてあったものが、後の世において政治の道具に転化させられたものであったとしたならば」。「国家元首の属性としての不可謬性は、神の子孫だという支配者には自然についてきたものであろうが、チャイナであれ日本であれ他のどこであれ、政治的意図のためには実に都合のよい教義である」。「神道の深い意味を知りたければ、原初の時代を探らねばならない」。「その起源は、チャイニーズの原初の宗教に近縁性がある」。「削るか、紙を付着させるかした棒を立てて、精霊の気を魅こうとする慣わしは、インドの山地部族の間でも、蝦夷のアイヌと同様に観察される。ヒンドゥー教徒、ビルマ人、チャイニーズは棒に代えて、旗や吹流しを使うようになった」。「神道がかつて偉大な結果を生じたとか、日本の民を深くとらえたものだったとかしたならば、これほど完全に仏教に取って代わられてしまうことなど、まずなかったであろう」。サー・ハリー S. パークス、英国駐日全権公使。立派な学識者で、チャイナと日本、両国で長く暮らす。

「神道ときいて先ず思うのは、死者に対する恭謙の情である。その政治的利用についていえば、日本に絶対政権を存立させるために国家がそれを助力の勘定に入れることは、全く正しいことだ」。「日本の古い記録は、決して信用できない」。アリノリ・モリ、日本人。以前使節として米国ワシントンに駐在、現在日本の外務次官。

※訳注：明治五年に大教院が発した教則

1. 「敬神愛国ノ旨ヲ体スヘキ事」
2. 「天理人道ヲ明ニスヘキ事」
3. 「皇上ヲ奉戴シ朝旨ヲ遵守セシムヘキ事」

（福井市グリフィス記念館職員訳）